

アゲハ舞う大田 医師の夢

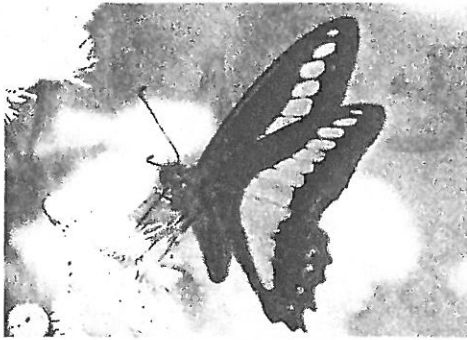
かつての昆虫少年、院内で飼育

2020年東京五輪・パラリンピックに向け、アオスジアゲハの舞う街にしようと、大田区が生育しやすい環境作りに取り組んでいる。その中心には、チョウをこよなく愛する一人の脳外科医がいる。

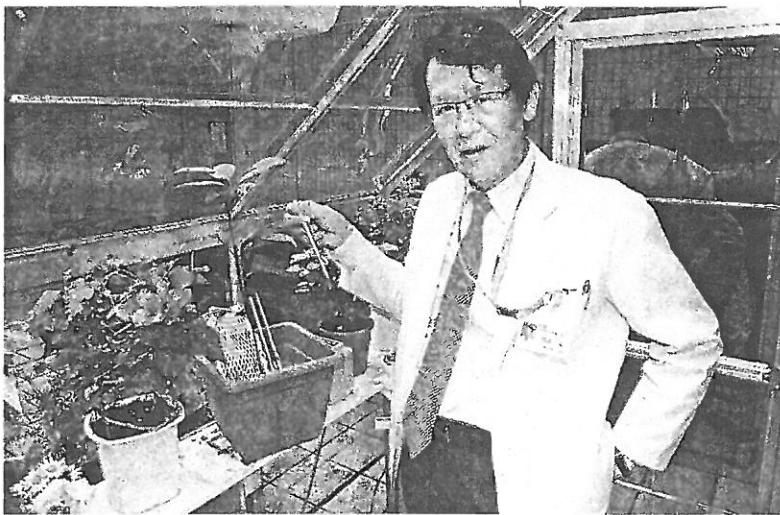
大田区の臨海部にある東京労災病院。中庭に小さな温室がある。照明はチョウが好む赤紫色。副院長で脳外科医の氏家弘さん(64)は慣れた様子でさなぎを手にした。「患者にとつて病

五輪・パラに向けた区の計画に協力

東京労災病院の中庭で飼育しているさなぎを手にする氏家弘さん＝大田区大森南4丁目



アオスジアゲハ 大田区提供



「自然と調和した街づくり」に期待

アゲハチョウの一種のアオスジアゲハは黒い羽に鮮やかな青い模様が入っているのが特徴で、豪州名が「ブルートライアングル」。区の木に定めたクスノキに卵を産み、幼虫はその葉を食べることから、区は昨年度、アオスジアゲハを観光のシンボルとする「ブルートライアングルプロジェクト」に取りかかった。温室は生態把握や繁殖の実験をするため、民間の寄付も受けて区が作った。

この計画に大きく関わるのが根っからの昆虫少年だった氏家さんだ。チョウを育て始めたのは約10年前。自宅の庭に飾った花の周りにいたチョウに見とれた。年間で執刀する手術は200例近く。診療や研究に明け暮れ、趣味も持たずにいた日々は潤いをもたらしたのは、ひらひらと舞うチョウだった。

氏家さんの診察室には机の下に小さな保温機がある。冬場の屋外に近い約10度に保つ中で、20匹近いさなぎを飼育している。成虫が活動するのは5月から10月ごろといい、間もなく羽化するという。

東京五輪・パラリンピックの計画では、大田区はホッケーの競技会場となる。氏家さんは4年後を見据えたうえで、町工場が多く日本文化の風情を残した区内の街並みが外国人観光客に親しまれると考えている。一方で「自然が少ない」と指摘する。区によると、区内の緑地の割合(緑被率)は20・5%と、23区の比較(調査年度が異なるため参考値)で上から5番目。しかし、緑地の多い羽田空港の区域を除くと3割減少し、新宿区と同程度になるという。

大田区は今後、実験施設をほかにも作り、アオスジアゲハが寄りつく植物を羽田空港や臨海部、五輪・パラリンピックの会場周辺に増やす。高い所で素早く飛び回る性質のため気づかれにくいアオスジアゲハが羽を休める場所を作り、その姿を観光客や住民に楽しんでもらうのが狙いだ。

区の担当者は「生態系を考慮しつつ、身近に見られるような仕掛けづくりを進めたい」という。初夏を迎え、アゲハの季節となった。氏家さんは「アオスジアゲハが自然と調和した街づくりのきっかけとなれば」と期待を込める。(辻健治)